【エントリー情報】

自治体名：広島市

学校名（自治体でエントリーされる場合は記載不要です）：広島市立五日市観音小学校

ご記入者：市村広樹

ご役職：

メールアドレス（※業務用のアドレスをご記入ください）：

電話番号（※業務用の電話番号をご記入ください）：

【設問】

① 貴自治体・貴校で目指している目標（ビジョン）・目標に至った背景・想いを教えてください。（1,500 文字以内）※可能な限り自治体や学校全体の目標をご記入ください。

本校の教育目標は「自律し学び続ける子どもの育成」だ。本校の実態は通常学級 ２０学級、特別支援学級 9 学級、全 29 学級の学校である。児童は、外で元気よく遊べる児童が比較的多い。反面、区役所の生活課や児童相談所、SSW などの専門機関連携が必要な厳しい背景をもつ児童も複数存在している。

本校の抱える課題は①基礎基本の学力の未定着、②聴くことや表現（伝える）することが苦手、③暴言や暴力、④一人で悩みを抱えてしまう児童がいることである。

さらに多忙な家庭が多く、子どもの学習状況や様子に興味関心をもつ保護者の割合も他校と比較しても少ない。また、家庭環境や発達的な課題を抱え専門機関との連携が必要な児童は、各学級に複数名存在している。結果として指示待ちの傾向が強い児童が多く、自ら思考し行動する楽しさを実感できないでいる。

まずは現状を把握するために離席などの問題行動を頻繁に行う児童らへの聞き取りを行った。その結果最後には９割以上の児童が「学業不振」であることを受け入れ難いことで、離席などの問題行動をとることがわかった。

このような背景は学校運営上の課題であり、家庭環境については学校が粘り強く保護者への声かけをすることになる。しかし学習や対人関係の構築については「学校でしかできない学び」で可能になる。そのためにミライシードの各機能を用い、「主体的に」学習に取り組む姿勢を身につけさせるようにしたい。

「ミライシード」で教員全員が使いやすい「ドリルパーク」を算数や漢字指導を中心に使い、基礎基本の定着と本校の児童の実態に合った授業方法を模索し、これまでの授業の形と ＩＣＴを組み合わせ、離席などの問題行動を防ぎ、学びに向かう姿勢を身につけさせようとしている。

また学習面に不安がない児童については、今以上の知識・技能の定着を図ることにとどまらず、高学年に向けて中学年でのローマ字の学習を踏まえ、キータッチでローマ字入力をすることでローマ字の定着と今後も残るであろうパソコンでの業務に必要なスキルを身につけさせたい。そうすることで「今は夢を持てない」児童も自分自身の将来の選択肢の幅を広げたいと考えている。

さらに業務軽減と客観的な評価を行うことで、成績の処理を短時間で行えることや子どもへの配慮、課題を常に把握し、児童の実態に応じた指導へフィードバックする。このような業務の時間軽減は教材研究

などの時間が増えることにつながり、児童へ還元できる正のループにつなげることをねらっている。その過程を経て学校目標である「自律し学び続ける子どもの育成」を達成しようと取り組んだ。

前年度から研究主任を中心に児童の学習内容の定着を図るために使用し、主幹教諭が業務軽減と客観的な評価が可能であるかを検証し、来年度以降校内で共有することを目的に仮設検証した。

② 目標（ビジョン）に向けた具体的な個人のお取り組み・学校全体でのお取り組み、学校の枠を超えて市や他校へ広がったお取り組みや、その中で発生した課題や苦労を教えてください。（1,500 文字以内）

学習面の向上は 3 点の活用を行った。特に算数の学力向上及び漢字の定着である。

① 各学校でも取り組んでいる「ドリルパーク」の明暗

本校は、朝学習を週に 15 分間 3 日取り、「ドリルパーク」を使い、算数の技能中心に定着を図った。また低学年を中心に児童が漢字の書き順を意識させ、漢字定着を図っている。児童の様子から児童は「ドリルパーク」には興味関心が高い。理由は 2 点ある。

1 つ目は「自由進度」だ。児童ができないと感じている、もしくは担任が「身につけさせたい知識・技能」を中心に取り組むことができる点だ。これにより 2 年生が 1 年生の課題、例えば繰り上がり、繰り下がりのたし算、ひき算を確認することが可能な点である。

２つ目は「ポイント制」である。大人が思っているよりも子どもたちはポイントを「貯める」ことが目標の大きなウエイトを占める 1 つの要因になっている。ただし児童の反応は 2 種類に分かれる。

1 種類目は「どんどん難しい問題に挑戦する児童」だ。難易度が上がれば一度にもらえるポイントも上がるため、「学習とポイント」を児童自身で連動させ、学びを広げていく。

2 種類目は「ポイントを稼ぎたい児童」だ。同じ問題を解き、1 ポイントでも連打するように繰り返し、ポイントを貯めることのみが目的化している。

後者は教員の裁量によるが、朝学習はあくまでも「自由進度」で行うため、全員の学力に応じた指摘は難しい。この課題については「ドリルパーク」の機能で制限できるとより良い「自由進度」が可能になると感じている。例えば解いた問題は一定時間が経過するまではできないなどだ。既習の問題は全くできなくなると「忘れたとき」に復習ができないことになるためだ。

② ミライシードへの課題と期待

「オクリンク」の画面共有でインタネット上の動画も共有画面で見ることができれば、「オクリンク」一つで授業をすることができる。現状、アドレスを送り各自で見るということをしているため、そういった機能が追加されればさらに使いやすいと感じている。

③ (3-1) ICT を活用することで、先生のご指導や働き方、児童・生徒の学び方や学習への態度、学習成果などにどのような変化があったか、またこれらの変化をどのように評価されているか教えてください。（2,000 文字以内）

① 前年度から「オクリンク」を使った「自分で多角的な視点を持たせること」

１） 前年度から算数を中心に行っている取り組みだ。具体的には課題ができた児童は自分のノートを写真に撮り、提出ボックスに送る。その「送られた考え」を自力解決ができない児童が見ることができるよ

うに公開しておき、自分に合ったヒントになるものを見つけ、追試する。この活動により「課題を解決する視点」を身につけることができた。

２）自分自身の考え方と違うものを見つけることで、1 つの課題を多面的、多角的にとらえることができた。

例）家庭科で「持続可能な社会」の学習

イラストの中で赤（危険）黄色（注意）青（安全）だと思ったところを囲み、提出する。すると同じ箇所に囲んでも「色の違い」で価値観や視点の違いを表示することができた

② 評価の可視化

ノートの提出をやめ、書いたノートを写真に撮って提出させた。その写真にスタンプやコメント、観点別の評価の星をつけた。このことにより 2 つの利点があった。

１）児童へのフィードバック

これまでは実際のノートを提出して思考・表現を評価し、フィードバックしていた。しかしこの方法だと次の授業までにノートを見る必要がある。

そこでデータ化することで、いつでも時間があるときに教員が評価できるようになった。さらに児童も必ず見ることで自分への評価を常に確認することができるようになった。

さらにそれを学級全体に公開することで、ほかの児童の評価がよかったノートを見ることができ、どのようにまとめたり、考えを書いたりすればよいかを実感させることができた。

上記のことを行った結果、児童の意欲向上につながり、学習に取り組もうとしている継続した姿が見られるようになった。特に算数科でいわゆる「飛び込み授業」をした際、上記のことを行った結果、次の飛び込み授業をしてほしいとの要望が児童から複数もらった。

また家庭科（6 年生）では、献立を考える学習の際、栄養バランスの取れた「完全メシ」になっている献立を各班で選ぶ際、お互いの献立をタブレットで一人ひとりの献立を確認してから話し合いをする姿が見られた。その過程で「対話」が生まれ、1 人選ぶ班もあれば、4 人とも選んだ班もあり、多様な意見が出される結果となった。

２）評価の数値化

評価の際、観点別に星をなし～３つまでつけることができる。上述のノートをデータ化し、評価基準に沿って各授業のノートを星の数で評価した。その後成績処理で星の合計個数により、3 段階の評価をすることができるようになった。

このことで、保護者からの問い合わせがあった場合も、手元にそのデータが残っており、説明責任を果たすことも可能になった。

思考・表現の評価は発表などでは「消えてなくなるため」加味する程度にとどめた。その理由は発表をしないから思考・表現をしていない、できないからだ。

その結果、教員自身がメモを取っておらず、ノート自体がないとどう評価したかを教員本人がわからないことが、評価基準に基づいて客観的な「数値」や「ノートの軌跡」で再度確認し判断できるとともに、説明責任を果たすことも可能になったうえ、「星の数」という数値化により極力、

「客観的」な評価から成績処理の時間短縮につながった。

(3-２)ICT 活用による成果について、定量的なデータでお示し可能なデータがあれば、教えてください。（1,500 文字以内文字以内）※本設問のみ任意回答

④　お取り組みの中でのミライシードの活用画面・活用機能お取り組みの中でミライシードが役立った場面・活用頂いたアプリ/機能を教えてください。

※活用エピソードが複数ございましたら、文字数制限内でご記入ください。1 つのエピソードに絞る必要はございません。（2,000 文字以内）

１）「オクリンク」画面共有

教員の見せたい画面を見せ、指示を統一させることができること。さらに「赤いボタン」を押して MY ボードで作業したり、確認するために教諭画面に戻ったりすることができ、個別の質問が少なくなった。

また児童にも画面共有のロックを解除し、発表させた。発表者以外の児童は自分のタブレットを見るため、発表自体が「自分自身」に伝えられていると感じている。学習に興味を示さない児童も発表を聞き、内容を理解することができた。

算数科の図形領域は特に効果的だった。作業は「オクリンク」の MY ボードで、重要な発言などは板書するという方法で行った結果、1 授業で書いた板書がそのまま「まとめ」になった。

２）業務時間削減

上記成績処理以外に PDF 化したものをカードにできるため完全ペーパーレスで教科を進めることができた。下学年はカードに書き込み、上学年は書き込んだり打ち込んだりして提出できた。他社の「ロイロノート」と同じ形式で使うことができた。そのうえで評価対象になるものについては観点と評価をデータとして残すこともでき、かなりの業務時間を削減できた。

その上、小さな蓄積でもプリントを回収、返却の時間もなくなり、時間をすべて授業で使えることができるようになった。